ふえき

時代を超えて変わらないもの

特集

2023年度福武教育文化賞贈賞式

83

公益財団法人 福武教育文化振興財団 機関誌「不易」

2023年度（第5回）福武教育文化賞

2個人、3団体へ贈る

大森静佳
（歌人／岡山市出身・京都市在住）

清水ゆき
（ミュージカル俳優／岡山市）

岡山楷の木少年少女合唱団
（代表 川崎泰子／岡山市）

株式会社ありがとうファーム
（代表 木庭康輔／岡山市）

玉野みなと芸術フェスタ実行委員会
（代表 斉藤章夫／玉野市）

地道な活動、幅広い活動に光を当てる

福武教育文化賞は、高い志を持ち、先駆的で地域への波及効果がある活動に取り組んでいる個人・団体を対象に顕彰しています。その第5回となる贈賞式が市内のホテルで10月28日（土）に開催されました。4年ぶりに、多くのご来賓をお招きして開催された今回の贈賞式。式典では、受賞者の皆さまに「これまでの活動」そして「今後の目標」について発表していただきました。活動紹介の一環として、子どもたちによるミュージカルやバンド演奏などの披露もあり、会場は大いに盛り上がりました。

式典後は受賞者とご来賓の皆さまとの懇親会を開催。和やかな交流の場となりました。

今年度も素晴らしい受賞者の皆さまをお迎えすることができ、改めて岡山県の教育文化活動の広がりを感じています。

公益財団法人 福武教育文化振興財団
代表理事理事長　松浦 俊明

この度、「福武教育文化賞」を受賞された皆さま、誠におめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

当財団は設立以来、教育と文化芸術の両面から、地域社会の課題解決と社会的価値の創造を図る活動を応援してまいりました。この顕彰事業では、岡山県の教育活動・文化活動の更なる充実と、次代に向けた先駆的な取り組みを一層高めていただく契機となることを願っております。

新型コロナウイルス感染拡大から3年半、コロナ禍は人々や社会に大きなダメージを与えました。このような大変厳しい状況の中にありながらも、受賞者の皆さまの継続的な取り組みを通じて、岡山県の教育文化の向上にご尽力いただいておりますことを、改めてお礼申し上げます。今後も、更に地域の未来に大きな役割を果たしていただけることを期待し、教育文化による人づくり、地域づくりにご尽力いただきますようお願い申し上げます。

当財団ウェブサイトに受賞者の皆さまの表彰理由・活動実績を掲載しております。ぜひご覧ください。

選考委員長　谷一尚　様
（林原美術館　館長）

福武教育文化賞を受賞された皆さま、誠におめでとうございます。

本年度、第5回目となる「福武教育文化賞」は、教育活動、文化・芸術活動の質的評価に加えて、地域振興への貢献度を重視した賞となっております。

世の中に様々な賞がある中で、福武らしい賞とはどのようなものか―それは、「高い志を持ち、先駆的で地域への波及効果がある取り組み」を評価し、今までの受賞歴や年齢にかかわらず「さらなる向上を求める若々しいチャレンジ」を応援し、そして何よりも「教育の振興、文化芸術の振興を通じて、人づくりや地域づくりに貢献」したか、またはこれから期待できるかという点に重きを置いた賞であるということです。それらを踏まえた上で選考させていただき、岡山の地域振興に大きく貢献されている素晴らしい個人・団体の皆さまにこの賞をお贈りすることとなりました。

今回も様々なジャンルで、多彩な候補者が多く、福武らしい賞とはどのようなものかをより深く考えさせられる選考となりました。

福武教育文化賞の意義を深く感じていただき、今後も引き続き活動の質をより高めていただくとともに、人づくり、地域づくりへのご貢献、ご活躍を心から期待しております。

大森静佳 氏

歌人・塔短歌会／編集委員

短歌や言葉を通じ、人と人がつながれる場を

「冬の駅ひとりになれば耳の奥に硝子の駒を置く場所がある」（「硝子の駒」より）

この一首を含む「硝子の駒」50首で、京都大学2年生の時に第56回角川短歌賞を受賞した大森静佳さん。高校2年生の頃、同じ高校の卒業生である小説家・小川洋子さんが高校時代に短歌を新聞に投稿していたことを知り、図書館にあった『現代短歌の鑑賞事典』の中から気に入った歌を書き写すように。「ペンが紙に溺れそうになるほど夢中で写していた」と同受賞のことばの中で語っています。

以来、刊行された歌集が賞を受賞するなど高い評価を受けており、2023年には、第3歌集『ヘクタール』が第4回塚本邦雄賞を受賞。現在、短歌総合誌や文芸誌に短歌やエッセイを寄稿する傍ら、京都精華大学の非常勤講師や短歌の新人賞である笹井宏之賞の選考委員を務めるなど、若手歌人として目覚ましい活躍をしています。

精力的に短歌の普及活動に取り組み、高校生を対象とした「高校生文芸道場おかやま」では短歌の講師として指導に当たるなど、岡山の地に短歌の魅力を積極的に伝えています。「短歌や言葉を通じ、人と人がつながれる場をつくっていきたい」と贈賞式で語った大森さん。短歌界に新しい風を吹かせる現代歌人として、さらなる活躍が期待されています。

大森さんが講師を務めるNPO法人アートファーム主催の短歌ワークショップ

清水 ゆき 氏

ミュージカル俳優

平和を芸術で繋いでいきたい

高校生の時に観賞したミュージカルに圧倒され、ミュージカル俳優への道を進むことを決断した清水ゆきさん。岡山県立の進学校へ通っていたため、歌もダンスも演技も本格的に学んだことはありませんでした。それでも夢を実現させるため、高校卒業後、ミュージカルコースがある専門学校へ進みます。周りが経験者ばかりの中、泣きながら稽古に明け暮れました。

卒業後は、ミュージカル劇団「Stepsエンターテイメント」に入団。9年間在籍した後、イギリスへ語学留学。さらに舞台芸術の本場であるニューヨークに渡り、ストリートパフォーマンスを行うなど、ミュージカル俳優としてのキャリアを積んでいきました。贈賞式では「さまざまな国の方々と交流できるのも平和があってこそ。留学での経験を通して、平和を芸術で伝えようと心に誓った」と当時の決意を語りました。

帰国後の現在は、岡山を拠点に多彩な活動に取り組んでいます。ピースコンサートの開催や学校・施設へ出向き公演を行うなど、平和への思いを胸に活動を続けてきました。地域イベントにも積極的に参加し、地元の人々とともに創作ミュージカルにも取り組んでいます。岡山県の音楽文化芸術の振興に大きく貢献しており、さらなる活躍が期待されています。

ピースコンサート

ミュージカル「星の王子さま」

岡山楷の木少年少女合唱団

代表　川崎泰子 氏

将来どんな世界でも活躍できる人に

「子どもたちのキラキラした笑顔が見たい。そして、その笑顔を沢山の人に見てほしい！」そんな思いがきっかけとなり、2011年に岡山楷の木少年少女合唱団は立ち上がりました。岡山県内の小学生から高校生までの幅広い年齢層の団員が所属。誰でも入団できる地元の合唱団でありながら、プロの音楽家や演奏家が本格的な指導を行っています。歌唱力や表現力だけではなく、「将来どんな世界でも活躍できる人に育てる」をモットーに、子どもたちの責任感・協調性・やる気を引き出す指導を代表の川崎さんは心掛けています。

2013年に初の単独コンサートを開催。2014年からは、合唱だけでなくミュージカルも取り入れました。以来、舞台役者による演技指導やミュージカルダンサーによる振付指導をもとに次々と新しい取り組みに挑戦し続け、年に1度行われるコンサートでは、毎年1000人以上の観客を動員しています。また、地元の方々が地域の文化・音楽に興味を持つきっかけになればと、市民センターなど地域の施設でコンサートの開催やボランティア公演を行ってきました。

近年では、団員が個人でコンクールに挑戦するなど、一人ひとりが活動の場を広げています。各種コンクールに挑み入賞実績を重ね、卒団後に音楽大学へ進学する団員も。舞台を経験する中で、団員たちは明確な目標を持ち、大きく成長しています。今後も、音楽芸術文化の発展と次世代育成への貢献が期待されています。

ミュージカル「アラジン」

株式会社ありがとうファーム

代表 木庭康輔 氏

誤解や偏見のない共生社会を目指して

「生き生きと堂々と、人生を生きる。」という企業理念のもと、障がいのあるなしにかかわらず、ともに幸せに生きることができる共生社会の実現を目指して活動を続けてきた株式会社ありがとうファーム。岡山市北区の表町商店街を拠点に、4種類の障がい福祉サービス（就労継続支援A型事業所、就労継続支援B型事業所、リワーク施設、共同生活援助）を展開しています。

「自分たちの給料は自分たちで稼ごう！」という考えを持ち、アートとサービス業の二本柱で事業を行っています。アート事業では、20名以上のメンバーがハンディキャップアーティストとして活躍。アート作品を貸し出すレンタルアート事業や企業と連携して商品パッケージやオリジナルグッズの作成などを行っています。サービス業では、表町商店街を中心に飲食店や雑貨屋など7店舗を運営し、商店街の活性化に大きく貢献してきました。その他、教育事業にも取り組み、インクルーシブ教育の実践を目指して開始されたHUB Lab.（ハブラボ）では、企業廃材を再利用して、子どもたちが自由な発想で創作活動を行っています。中心となって講師を務めるのは、障がいのあるメンバー。障がい・年齢・性別を超えたボーダレスな場として、子どもたちの自主性と協調性を育てるプログラムを実践しています。

アート・音楽・教育から飲食に至るまで、多彩でユニークな表現活動を展開しており、その多様な活動は、地域の活性化と共生社会の実現に大きく貢献しています。

HUBLab.

ありがとうファームのメンバー

玉野みなと芸術フェスタ実行委員会

代表 斉藤章夫 氏

これからも文化の灯をともし続けたい

2003年から活動を開始し、今年で20年を迎えた玉野みなと芸術フェスタ実行委員会。当時、玉野市は宇野港を観光ネットワークの拠点として活性化させようと、現代アートによる町おこしイベントの実施を計画していました。市内の各種団体に声を掛け、イベント案の説明会を開催。実施困難と思われる現代アートの企画内容に誰もが懐疑的な雰囲気の中、唯一「おもしろい！」と発言したのが「NPO法人スマイルネット玉情協」でした。IT推進と町おこしを目的として2003年に設立したばかりのアートとは無縁の団体でしたが、メンバーが中心となって実行委員を担うことに。こうして玉野みなと芸術フェスタ実行委員会が正式に立ち上がりました。この時開催されたイベントには、延べ8000人もの市民が参加し、内外から大成功との評価を得ました。

2007年からは、市内各地の歴史と文化を掘り起こすためフィールドワークを実施し、活動範囲を広げてイベントを展開しています。2009年に開催した「しおさとまつり」では、玉野市における塩づくりの歴史と文化をモチーフとした創作狂言を上演。2018年には、教育事業として「こども芸術アプローチ」を開始。市内の幼稚園にアーティストを派遣して、子どもたちに表現活動を体験してもらうなど、次世代育成の教育にも取り組んでいます。

「文化で潤う芸術のまちへ、そして、おもしろいまちへという想いを胸に、これからも活動を続けていく」と語った代表の斉藤さん。地域に根差した活動は、文化振興に大きく貢献しています。

「TAMAFES20年の歩み展」

2022年度 教育文化活動助成成果報告会

多種多様な、地域の特性を活かし助成活動の成果を社会へ還元

オンライン成果報告会

31団体がオンラインで活動報告 延べ245名が参加

9月1日から4日の4日間にわたって開催したオンライン成果報告会は、延べ245名が参加。遠方の方や子育て中の方でも参加しやすく、発表の様子は後日視聴できるので、参加できなかった方にも好評です。コロナ禍で対面による成果報告会の代わりにと始めたオンライン成果報告会ですが、助成対象者の多彩な活動を知っていただく良い機会となったことを実感しています。

発表は財団公式youtubeからご覧いただけます。

参加者アンケート結果

Q.1 助成対象者による発表にはどのくらい満足されましたか？

- ★★★★ 34人 50.7%
- ★★★ 29人 43.3%
- ★★★ 3人 4.5%
- ★★ 1人 1.5%
- ★ 0%

他の団体の頑張っている様子を、知ることができて、刺激になったため。

助成金の使い方がよくわかりました。

報告書を読むより発表を聞いたほうが、よくわかりました。

スライドが見やすいし、発表内容もよかったです。

発表者の熱意や、人柄の魅力を感じることができました。

Q.2 ご自身にとって役立つ内容でしたか？

- ★★★★ 35人 52.2%
- ★★★ 26人 38.8%
- ★★★ 5人 7.5%
- ★★ 1人 1.5%
- ★ 0%

活動を継続するための工夫を知れてよかった。

連携体制の構築や多様な参加者を集めるための工夫について勉強になりました。

自分自身が参加できるイベントや企画があれば参加してみたいと感じました。

成果報告のため、達成した内容の説明が多いのですが、失敗や新たな課題について伺ってみたい。

教育関係のお話が多く、学びある時間になりました。

子どもと関わる事業などは、我が子にも体験させてみたいなと思えました。

複数の方より、ダイレクトメッツセージをいただき、繋がりができた。

ジャンルはちがっても参考にできるところはあると思ったから。

審査委員の方々のフィードバックも活動を補足してくださるものもあり、理解が進み分かりやすかったです。

審査委員　岡田智美さん
山陽新聞社 編集局文化部 部長

「初めて審査に参加させていただき、子どもの学びから地域おこし、国際交流まで、こんなにもたくさんの活動が県内で生き生きと進行していることに驚きました。オンライン、対面による顔が見える報告は、迫力あふれるパフォーマンスもあって、とても楽しかったです。私自身、交流会では新しい出会いにも恵まれました。助成が活動の背中を押す、成果報告の場を設けることでさらに人をつなげ、活動を広げる手助けになっていると実感しました。素晴らしい報告会、ぜひこれからも続けてほしいです」

対面形式による成果報告会

4年ぶり対面形式による成果報告会及び交流会8団体がステージで発表約300名参加

9月30日、4年ぶりに開催した対面形式による成果報告会及び交流会は約300名が参加しました。パフォーマンスを中心にした団体によるステージ発表は、新見市の千屋牛追唄からスタート。コロナ禍を乗り超えた8団体の生き生きとした発表は、参加者を笑顔にしました。

会場を移した交流会では、参加者同士が交流を深めている様子が多く見られ、新しい出会いや発見に繋がったのではないでしょうか。

糸あやつり人形劇団「つきみ草」

千屋牛追唄地元保存会

大江戸玉すだれ岡山社中竹風会

玉野しおさい狂言会

山地真美

桃太郎少年合唱団

ズンチャチャ

フルート・ソロイスツOKAYAMA

参加者アンケート結果

Q.3 ステージ成果報告発表はいかがでしたか？

- 互いに関心を持ち、刺激を与え合い受け取り合うんだというエネルギーを感じました。
- 知らない団体がたくさんあり、刺激をもらいました！
- 異文化交流できたことと、それぞれの団体のパフォーマンスを見ることができて、とても刺激になった。
- オンラインの成果報告会では見られないパフォーマンスを見られて、リアルのよさを感じることができた。
- 岡山に根差した文化に触れられ、自然と笑顔にもなれる、素敵な時間でした！！
- 分野も様々でしたが、それぞれに創意工夫して伝えたいメッセージがはっきりしていた。

交流会

Q.4 交流会はいかがでしたか？

- たくさんの人と会えてとても嬉しかったです。勉強になりました。交流したいけど勇気が出ない人もいるので、ちょっとインタビューというか紹介みたいなのがあっても面白いかなぁと思います。
- 対面で話をさせていただくことで人的つながりができ、資産となった。
- たくさんの前向きなエネルギーを浴びた。
- 今まで名前しか知らなかった方々と接点を持つことが出来た。
- 知っている方と話す機会があり、その方が紹介してくださったりと、つながりを感じることができたため。

審査委員　成清仁士さん
ノートルダム清心女子大学 人間生活学科 准教授

「目の前で演じられた創造的なパフォーマンスに感動しました。成果報告会には、自身が壇上で発表した10年前から、助成を受けてない年も県外に住んでいた時にも毎年のように参加させてもらいました。岡山県内の教育文化関係者が集う貴重な交流機会だと思っていますので、久しぶりの対面による報告会開催を嬉しく思いました。ちなみに今回も交流会でよい出会いがありました。対面でちょっと話せることが大事だと思います」

今回のアンケート結果を参考に、岡山県内の多様で多彩な教育文化活動を知っていただくと共に、有機的なつながりが生まれるような成果報告会及び交流会にしていきたいと思います。

瀬戸内スタディツアー実施報告

アートへの興味を深めた体験ツアー

瀬戸内スタディツアーは、備讃瀬戸の島を巡って、アートに親しみ、アートを通して地域を知り、アートから自分の考えを導く、中高生対象の体験学習。2023年度は夏・秋・冬と実施しました。

内容はオンラインによる事前レクチャー、島のツアー、振り返り会の3部構成です。事前レクチャーは自己紹介、島の話、テーマを共有。島のツアーはスケッチブック片手にテーマに沿ったプログラムを体験し、振り返り会では体験したことを共有しました。参加者は延べ30名。

プログラムは高校魅力化事業に従事する傍ら、アートマネージメント講座の講師も行う江森真矢子さん（一般社団法人まなびと代表）、若者と大人をつなぐだっぴイベントや中高生・大学生に向けたワークショップを届けている森分志学さん（NPO法人だっぴ代表）を中心に企画し、瀬戸内国際芸術祭サポーターのこえび隊の協力も得ながら、ここでしか体験できない魅力的なプログラムとなりました。

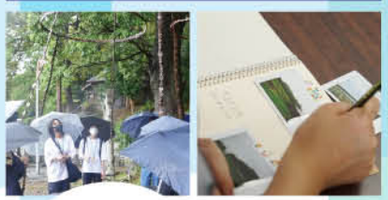
振り返り会では、同じ体験をしても、一人ひとり感じることはまったく違い、見ている風景も異なっていることを改めて実感しました。

瀬戸内国際芸術祭
スタディツアー
2023報告書

「アートを五感で体験しよう」

夏 8月

振り返り会
五感のどこで × どんなふうに感じた？



五感を研ぎ澄まして全身でアートを感じることができた

同年代の芸術に興味がある人たちと話すことができたし、自分にはない感じ方など共有できた

「アートの役割を考えよう」

秋 10月

振り返り会
アートって何だろうをたくさん考える

印象に残っているのは、豊島美術館が絵画などはない美術館だったこと、照明や窓がなく、自然を最大限に生かしていたこと

「アートで“自分”を考えよう」

冬 12月

振り返り会
言葉で表現しよう

心臓音のアーカイブが印象的だった。初めてみる感じの展示だった。展示するのは有形のものだけではない

参加者の声

普通に生活しているだけでは経験できないようなことを経験できた

ハロー！ミュージアム　中間報告

実際に美術館に行ってみよう（川東小学校）

事後学習①対話型鑑賞を体験してみよう

事前学習①美術館を楽しむためのレクチャー（加美小学校）

ハロー！
ミュージアム
ガイドブック

本物にふれ、ワクワクを体験

岡山県の小学生全員が卒業するまでに一度は美術館を訪れ、本物のアートに出会い、わくわくする体験をしてもらいたいという思いからハロー！ミュージアムをスタート。

美術館を楽しむためのレクチャーを経て、美術館では一人ひとりが作品と向き合い、事後学習では自分の目でみて感じたこと、考えたことをみんなで語りあうようなアウトプットの場を作ります。単なる体験だけでは終わらない教育プログラムです。自らの感性を刺激して新しい考えを創るアートの力を教育にいかしていければと期待しています。

2023年度は助成事業として美作エリアの公立小学校の小学3年生または4年生を対象に公募し、6校が決まりました。

2023年度助成事業　参加校

	学校名	学年	児童数
1	真庭市立川東小学校	4年生	17名
2	美作市立美作第一小学校	4年生	31名
3	勝央町立勝央北小学校	4年生	38名
4	鏡野町立大野小学校	3年生	31名
5	新庄村立新庄小学校	3・4年生	12名
6	美咲町立加美小学校	3年生	24名

参加した担任の先生の感想

勝央北小学校　鷹取理絵 教諭

大原美術館のことを知らなかった児童が、大原美術館に行くのをとても楽しみにし、興味深く作品を鑑賞し、その後の作品制作、発表まで、とても生き生きと取り組みました。事前・事後指導で大原美術館から講師の方に来ていただき、大原美術館について学び、みんなと一緒に鑑賞する中で、多くのことを感じ取ったからだと思います。

本物の作品に出合い、題材や色づかい、塗り方などに個性があふれていることに気付いたことは、「まぼろしの花」を描くのに大きく影響しました。自由にイメージし、どんな塗り方をしようか、どんな色でどこから塗ろうかと、一人一人が考えながら作品に向かう姿はとても印象的でした。

その後の学習発表会では、子どもたちからの提案で、劇にして「ハロー！ミュージアム」で学んだことや感じたことを発表し、保護者の方や他学年の児童、他の教員にも成果を報告することができました。

事後学習②表現してみよう「まぼろしの花」（勝央北小学校）

僕が、活動をはじめた理由

里山から「世界をつなぐ」きっかけを

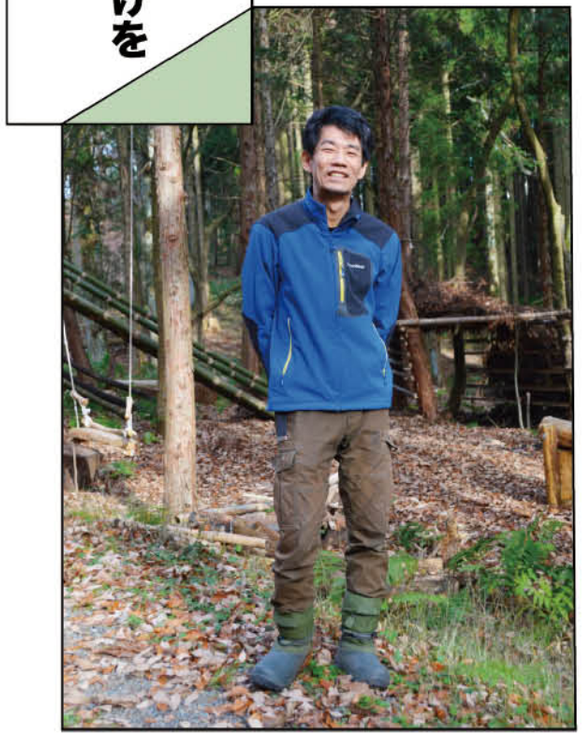
文・大岩 功　一般社団法人 はにわの森 代表

大阪で中学校の理科教員をしていました。世界の美しさや多様性の尊さを、それらが失われるかもしれないとする時代で「エシカルに生きること」を、黒板に書いて説明し、知識を伝えてきました。同僚や生徒たちに恵まれ、喜びに満ちた日々を過ごしていましたが、違和感はなくなりませんでした。トレーサビリティを信じてフェアトレード商品を購入したり、投票に行ったり、募金をしたりしましたが、空っ風を感じました。その違和感を払拭するため、6年前に木質バイオマス発電に取り組む真庭市へ移り住みました。

米や野菜を育て、鶏を飼い、シカやイノシシをさばいて食べ始めました。人工林を切り、混交林にもどしつつ、製材して大工仕事を始めました。知識として伝えてきたことは、体験すると、はるかに腑落ちするものであり、なにより「世界史を追体験する」感動に満ちあふれたものでした。

はにわの森のミッションは、里山で「暮らしをつくる」ことを通して、多様な「世界をつなぐ」きっかけとなる「原体験」を提供することです。自然を手間暇かけて加工し、他の命を取り込みながら生きることは生物として不易であり、世界はそこでつながっています。そんな原点やつながりを教材化して提供できないか、日々模索しています。今回の「シン・森プロ」は、どこの森でもできる体験プログラムとなりました。おかげさまで保育園の裏山などで活用していこうという話も進んでいます。

また、真庭市と「まにわ里山留学」という独自の山村留学制度を共創しています。ふるさとを失いつつある次世代に、持続可能性のフロントラインである「里山暮らし」の魅力となつかしさを届けたいと思っています。



一般社団法人 はにわの森

水源の森をみんなで少しずつ体験学習施設として整備しながら、多彩なゲストや子どもたちと合同キャンプを開催。そのような中で共同開発される体験プログラムを教育現場に提供している。

アスレチック広場の様子(左手前は剪定枝ドーム・中央にスッカ風秘密基地・右奥に竹滑り台や曲がり枝ジャングルジム)

ブランコの座面用木材の「ちょうながけ講習」世界丸ごと体感キャンプ(7/29-30)にて

私が、活動をはじめた理由

「自分は大切」と感じてもらいたい

文・宇野 香織　いのちのおはなし岡山 代表

「自分が好きではないという子どもがいる。頑張って生まれてきた大切な存在であることを、命の現場ではたらく助産師から伝えてもらえないだろうか」と声をかけてもらったことが活動のはじまりでした。たしかに、小学生のプログラムの中で「自分のことを好きな人いる?」と聞くとチラホラ(なかには、本当は好きだけど、言いたくない子どももいると思いますが)しか手が挙がりません。それにもかかわらず「じゃ、自分のことあんまり好きでないなぁ~と思っている人?」と聞くと、驚くほど手が挙がるのです。私たちも驚きました。子どもたちは自分がどうやって生まれてきたのか、これから自分がどう成長していくのかということにはとても興味津々。自分のいのちはどうやって始まって、どんな戦いを乗り越えて生まれ、どう成長し、今ここにいるのかということを話すと、「私ってすごい」「俺がんばった」「おうちのひとにありがとうって言いたい」と、どの子もとても嬉しそうで、自分はすごく頑張っていること、そして自分は大切な存在であることを感じているようです。

プログラムは対象年齢に応じて出来るだけ多くの視覚的な教材や触れる教材を準備し、楽しく、わかりやすく参加してもらえるように工夫を重ねています。開催校が少しずつ増え、それにあわせてメンバーも増えましたが、全員が現役の医療者のため、日程調整が大変です。しかしながら、お声かけ頂いた学校へは可能な限りすべてお伺いしたいと考えているので、メンバーは日々体調管理に努めて日程調整を行い、楽しく元気に活動を続けています。

いのちのおはなし岡山

実際に「いのち」が生まれてくる現場で働くメンバーが、子どもたちに、自分には「生きるちから」があることを実感してもらうため体験型授業を提供している。自分を好きになり、これからの未来の自分に夢や希望の手助けをする。

小学校での講義の様子

赤ちゃん抱っこを体験の様子

助成金申請前に知っておきたい、やっておきたい準備

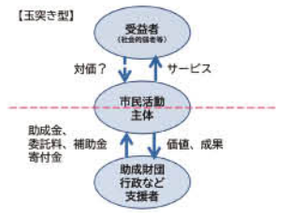
今回のテーマは「助成金申請前の準備」です。公益社団法人岡山県文化連盟 主任で、現在岡山県に3人しかいない認定ファンドレイザーの高田佳奈氏を講師にお招きし、助成金の意義や申請前の心構えなどを学びました。

講師プロフィール

高田 佳奈

公益社団法人岡山県文化連盟 主任
認定ファンドレイザー

1978年岡山市生まれ。行政や広く文化団体等を「まとめ」「つなぎ」「のばす」県内唯一のネットワーク団体職員として、行政委託事業や様々な協働事業を行う。子どもたちに本物の文化体験を届ける学校出前講座のチーフコーディネーターも務め、年間150件以上の講座を総括。2017年度からは中国地方初の地域アーツカウンシルとなる「おかやま文化芸術アソシエイツ」を担当。



助成金は、主にNPO（民間非営利団体）が団体の活動を広げ、事業を継続させるための資金調達を一時的に支援するものです。講師の高田さん曰く「助成金申請とは、活動の価値を言語化し、（助成団体や社会からの）共感を経て、活動資金を得ること」。活動を始めた際の「社会を良くしたい」という初心を忘れることなく、その目的をしっかりと伝えることが最も大切ですとの提言から講義が始まりました。助成金を理解するための3つのポイントから一部を紹介します。

[1]市民活動の特徴

種類としては「課題解決型（社会的弱者を支える）」と「価値創造型（表現活動の先に社会に役立つ）」の大きく2つに分かれます。
資金調達の方法として、一般のビジネスでは受益者から対価を受け取るが、市民活動では受益者（社会的弱者等）から対価を受け取ることが難しく、助成体から助成金を受け取り活用することが多いです。

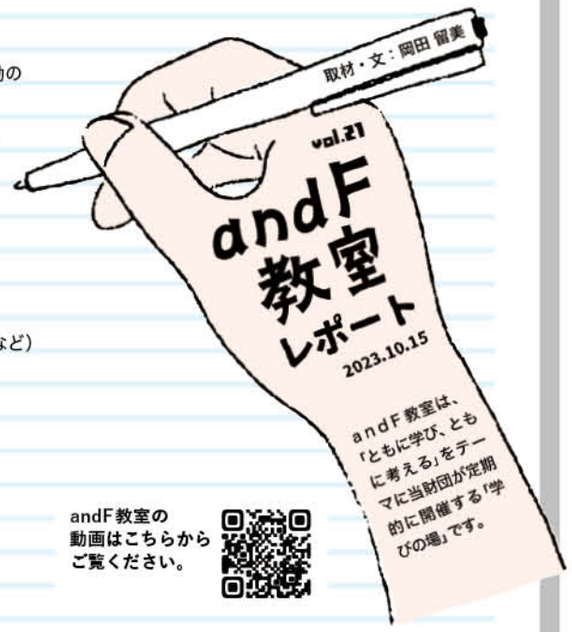
[2]助成金のメリット・デメリット

◆メリット
①まとまった金額の調達
②資金以外の資源がもらえる（助成団体から活動の告知や情報を得られるなど）
③支援されていることで信用が増す

◆デメリット
①審査がある
②用途（活動対象）が限られる
③運営費（人件費や事務所経費等）に利用できないことがある
④単年度・単発の助成が多く助成終了後に活動が困難になる
⑤自己負担金が必要になる場合がある
⑥清算払いの場合、立て替えが必要
⑦決められた会計処理・報告書提出などが必要
特に留意点として、活動を支える基礎的な部分には助成金を利用できないことが多く、助成金ありきで活動の運営を支えようとすると継続が困難になります。財源・事業・組織、三者それぞれの成長を見据えた活動計画が必須と言えそうです。

[3]助成金の特徴

募集は春（5月）と秋（11月）が多く、採択率は2〜3割（全国平均）です。申請期間等、助成財団センターなどの検索サイトで情報収集しておきましょう。
講義で最も印象的だったのは冒頭から語られていた、言語化、共感といった「心」へのアプローチが重要だということ。
また、助成金を受け取る側は一方的に支援してもらって終わるのではなく、「助成元の掲げる社会目標を一緒に目指すパートナー」であるということ。そうした心構えを持つことで、自己満足ではない、より高い視点での事業計画が可能になるのではないかと感じました。
申請書は「助成先へのラブレター」。助成団体の募集要項を徹底的に読み、求められていることを理解した上で、活動の思いをしっかり届ける準備をしてください。



andF教室の動画はこちらからご覧ください。

シリーズ Face

取材・文　森分 志学

情報発信って一体なんでしょうか。

1枚の写真の中に、魅力的なスーパーカブ（バイク）と素敵な風景が写っているInstagram「こばんとソラコ」。フォロワー数1.5万人のこのアカウントを運営する小林美希さんは、浅口市を拠点に情報発信分野で活躍するフリーランス。ライターとしてまちづくりに関わる小林さんの情報発信に対する姿勢について、お話を伺いました。

ええがLabo代表
小林 美希
Kobayashi Miki

大阪府出身、岡山県浅口市在住。大阪女子大学卒業後、長崎県と東京都で9年半、テレビショッピングのディレクター・デザイナーとして勤務。退職後、2017年5月〜2020年4月、浅口市地域おこし協力隊としてまちの情報発信を行う。現在は個人事業主となり、SNS集客サポート、講師業、ライターなどを行う。趣味はホンダスーパーカブでの旅。47都道府県を走った。好きな道はしまなみ海道。

まちを応援するライティング、お手紙だと思って書いています。

小林さんは大学を卒業後、ジャパネットたかたに就職。テレビショッピングのディレクター・デザイナーとして約9年間従事しました。退職してからは実家のある大阪に戻りますが、都会よりも地方で自然と暮らす方が合っていると考え、浅口市の地域おこし協力隊を選びます。

協力隊では、浅口市の情報発信で活躍。Instagramアカウント「あさくちさんぽ」を立ち上げ、Instagramユーザーに写真を投稿してもらうことで、みんなで浅口市の情報発信をする仕組みをつくるなどしました。3年間の任期満了後は、愛車のカブや協力隊時代の経験を武器に、フリーライターとしてまちづくりや周辺の観光、自身の趣味であるバイクの記事などを執筆しています。

執筆時に小林さんが大事にしていることは大きく2つ。1つは、その情報を誰に伝えたいかを明確にし、ターゲットにとって分かりやすい文章を書くこと。もう1つは、誰かの取り組みを記事として発信する場合、その取り組みをしている方へのお手紙だと思って書くことだそうです。読者に向けて書くことはもちろんですが、自分の書いた記事が、取材した人の背中を押したり、モチベーションを上げたりして、「明日からまた頑張ろう」と思ってもらえることを心掛けています。この考えは、協力隊で地域の人たちと関わったことで生まれてきたと話す小林さん。記事にすると喜んでもらえたり、「またお店に来てね」と言ってもらえたり、人との関係がつくられていくと言います。北木島の石でアクセサリーを作っている方の記事では、それをきっかけにテレビ取材が入り、ブランディングや集客に貢献できたり、上竹ホタルを守る会の記事では、ホタルの観賞に来てくれる人が増えたりと、小林さんの記事がまちに貢献しながら、ご縁も広がっています。

小林美希さん

インタビューすることは、取材する人の言語化を手伝っている行為でもあります。そのためには、その人の背景をどれだけ理解できるか、下調べはもちろんのこと、質問力も重要で、小林さんはまだまだ磨いていきたいと話します。その人を理解したいという姿勢は、書くことと人とつながることが隣接している小林さんだからこその感覚のようにも思えます。また、取材に必要なディレクション能力は会社員時代に鍛えられたのだそうです。

現在は、ライターの仕事は徐々に減らして、Instagramの発信に関するレクチャーや運用代行の仕事を強化されています。一方で、まちのために活動する人の応援になるような記事は継続して執筆。小林さんにとってのライティングは「手紙を書く」という意味がより強くなっているのかもしれません。

今後は、自由度を持って働きたい方たちと一緒に仕事をつくり、かつ社会に貢献できるような体制を構築しようとしています。小林さんのような、仕事としての情報発信と地域を応援する情報発信が融合できる在り方を広げるべく、情報発信のサポートができる人を育てることへの挑戦が始まっています。

NPO法人だっぴ 代表理事
森分 志学 Moriwake Shigaku

1990年、岡山県倉敷市生まれ。大学院生時代に、高校生と大人の対話プログラムを高校と連携してつくる。卒業後は、教育系の広告代理店に勤務して、高大接続の領域に関わる。2017年に岡山にUターンしてNPO法人だっぴに入職し、2020年より現職。県内15市町村50校以上の学校や自治体の学校教育・社会教育に携わる。

今号の表紙画

画・文　タケシマ　レイコ

可愛いあの子はすぐ近くに

小さい頃、鳥類図鑑がバラバラになるほど鳥の観察をしていた私にとって、ジョウビタキは馴染みの可愛いお友達。しかし動植物に関心がない周囲の人たちは、知らないし探せないと言います。雄鳥はあんなにも鮮やかなのに。鳴き声は響き渡り、町中から田舎までいろんな場所で出会えるのに。なぜ？　関心を持たないと見えず聞こえない。これは何事にもいえることなのですね……（自戒を込めて）。

では、どうしたらジョウビタキを見つけられるでしょうか？

アスエコの山田哲弘さんが、鳥の観察で役立つ「物差し鳥」という言葉を教えてくれました。「物差し鳥」とはスズメ、ムクドリ、ヒヨドリ、キジバト、ハシブトガラスなど誰もが知っている身近な鳥のこと。知らない鳥を見かけたとき、「スズメより大きくて、ムクドリより小さい」といった具合にヒントになるのです。

ジョウビタキはスズメとほぼ同じ大きさで、長めの尾羽を小刻みに振りお辞儀するようにして、甲高く澄んだ声で「ヒッヒッ」と鳴きます。枝の先端などにとまることが多いので比較的見つけやすく、さらに雄鳥の鮮やかな赤茶色のおなかはよく目立ちます。雌鳥は地味ですが動きと鳴き声は同じ。ぷくっと膨らんだおなかでぴょこぴょこ尾羽を振っている姿は実に愛らしいです。

そんな可愛いジョウビタキは冬の訪れを知らせる鳥でもあります。晩秋から見かけるようになり、春には繁殖のためシベリアなどへ数千キロも旅する渡り鳥。小さな体からは想像もできない逞しさに、愛しさと共に敬意を抱きます。

1種類でも鳥を見つけられるようになると一気に楽しくなります。そして今まで近くにいても見えず聞こえなかった他の生き物も見分けられるようになってくるのです。そんな楽しさと豊かさを知る方がたくさん増えたらいいなと思います。

【取材協力・環境学習プラザ「アスエコ」山田哲弘 所長】

タケシマ レイコ

グラフィックデザイナー／イラストレーター　岡山市生まれ。女子美術大学卒。エディトリアルデザイナー羽良多平吉に師事。氏から「デザインと編集は、作り手の生活と直結している」ことを学ぶ。帰岡後独立。届けたいことを、届けたい相手に、心を込めて伝える贈り物のようなビジュアルコミュニケーションを目指し県内外で活動中。倉敷市立短期大学非常勤講師（2018年4月～）。

編集後記

◆2024年はコロナ禍もかなり収束し、いよいよ世の中の動きも活発化する気配がというところに、年明け早々能登半島地震、羽田空港での事故と痛ましい年明けとなってしまいました。被災された皆さま、事故に遭われた皆さまには心よりお見舞い申し上げるとともに、亡くなられた方やご家族の皆さまには心よりお悔やみ申し上げます。◆2023年当財団では、新型コロナの影響でリアル開催を見送ったり規模縮小して実施したりしていた、成果報告会や福武教育文化賞贈賞式、中野信子氏を迎えての35周年記念講演会などをコロナ前のように実施して、多くの助成先や関係者の皆さまと直接お目にかかり、お話しさせていただく機会が増え、元気をいただけた年でした。また、助成先の活動もコロナ5類移行後活発になり、イベントや公演に可能な限り参加させていただきました。◆ただ世の中を見回すと、喜んでばかりはいられない情況を、世界で日本で、岡山の地でも見聞きすることが多い昨今でもあります。これら世情に感度よくアンテナを張りつつ、この岡山で地に足をつけて、岡山を元気にする、充実したコミュニティづくり、豊かなコミュニケーションが生まれる活動を展開するとともに、同じく志をもつ個人・団体の皆さまを応援させていただく1年でありたいと思っております。◆今年度新たに始めた事業活動を含め、しっかり総括し、来るべき新年度はパワーアップして臨めるよう年度末勤しみます。本年も、一緒に岡山を盛り上げていきましょう。(S)

人づくり、地域づくりを応援します
公益財団法人 福武教育文化振興財団
FUKUTAKE EDUCATION AND CULTURE FOUNDATION

〒700-0806 岡山県岡山市北区広瀬町1番5号 株式会社ベネッセコーポレーション広瀬町社屋
TEL 086-221-5254　FAX 086-232-3190　URL https://www.fukutake.or.jp/
E-MAIL eczaidan@fukutake.or.jp

福武教育文化振興財団ウェブサイト　コミュニケーション・マガジン and F｜アンドエフ　教育文化活動助成成果報告書アーカイブ

題名「不易」には、「時代を超えて優れたものに共通する本質的なもの」を大切にしたいという谷口澄夫初代理事長の思いが込められています。

機関誌 不易　vol.83　2024.1.25

編集・発行　公益財団法人 福武教育文化振興財団
制作　株式会社吉備人
デザイン　久延フミカ（ヒラガナ企画）
印刷　研精堂印刷株式会社